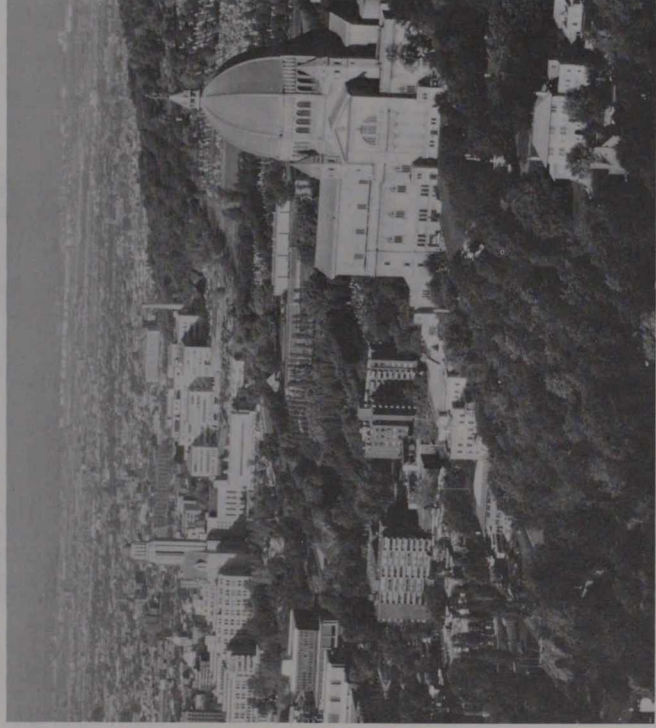


アメリカの諸都市に見られる建築が、相互に何の関係もない孤立した建物の集合体にすぎず、各建物が不協和音を鳴り響かせているのに対して、カナダは、その都市におけるコミュニティー計画を通して、個人の満足よりも共同のための価値が重要な意味をもつような形で都市形成がすすんでいる、ともいう。このためカナダの都市には、「はなばなしい建築」が少ないことも事実であり、カナダの都市がさまざまな努力や手法の開発を繰り返しながら、一面において単調さをまねがれない、と指摘している。カナダの都市はいわば多様性に満ちており、それが単調さを招いたとしてもそこには都市の調和をはかるメカニズムが内在している



緑に囲まれたモントリオール市

ことが、彼の語り口からよくわかる。別のいい方をすれば、これらの特性こそ、「住みやすさ」を求めるカナダの都市の姿だといってよい。

「創造的妥協」

カナダの都市は、ジャック・ダイヤモンドの指摘をまったくまともに、調和ある、多様性に満ちた性格を全般的にもっている。そしてそのスケールは人間的であり、表情は生態的、自然的であるといつてよい。しかし、それはある意味では、カナダの文化もそうであるように、いわゆる妥協の産物であるのかもしれない。

モントリオールは、万博やオリンピック

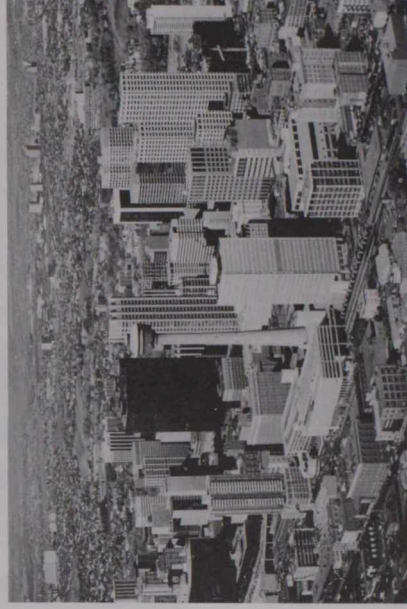
クのように世界が目をみはった施設をもちながら、市民の自慢の地下鉄サ・メトロが交差する中心部に都市の核がある。しかし、十八、九世紀のセンスをのこしたたなずまいと、ダウンタウンの躍動的なオフィス街とは対をなして、そのコントラストこそこの都市の魅力がある。セントローレンス川にちなむ歴史性と、フランス語の行き交う文化性が、こ

人口も急激にふえ(過去三年間で十万人増)、いま六十万人をこえる。

特に、弧を描いて流れるボウ・リバーの内側の長方形の都心部は、「カナダの都市の歴史の中では、これほどの規模で、

またこれほど密集してオフィス用高層ビルが建てられた例はほかにない」と、ある評者が述べているほどで、ミラー・ガラスやアルミに包まれたさまざまな形のビルが、はるか向こうのカナディアン・ロッキーを背景に美しく空にのびる。都心では、現在も約五十の高層ビルが八五年までの完成を目指して計画され、あるいは工事を進めている。

新築高層ビルには、地上十五メートルのところ隣接ビルと連絡するガラス張りの歩道が設けられている。連絡歩道網はやがては十九キロメートルにも達し、都心をビルからビルへと渡り歩ける“空



カルガリー市市中心部

中道路」となる。

こうした高層ビル・ブームには批判もある。“ビル風”や広場、あるいは交通網に十分考慮が払われず、ただ鉄とコンクリートとミラー・ガラスのジャングル

と化した、という批判である。

そこでカルガリー市では昨年二月に新しい都心計画案を発表、高層ビル建築による日照や風速に対する影響を少なくする方法を講じるほか、都心部でのアパート建設や露天市場の設置、広場の増設などを進めることになった。

また工費七千四百万ドルの芸術センタ

ーが建設中で、さらに八八年の冬期オリンピックに関連してさまざまなスポーツ施設や文化施設も計画されている。軽量快速の通勤電車も昨年からは走るようになった。冬期オリンピックの開催で、カルガリーは再脱皮するに違いない。

バンクーバー VANCOUVER

バンクーバーは、都市として信じられないほどの自然条件に恵まれている。山

を背にして前面は海、澄んだ空気、年間を通じて快適な気温。そしていたる所に